

『センス・オブ・ワンダー』

レイチェル・カーソン/著 上遠恵子/訳

新潮社



コロナで外出もできず鬱々としていたある日、ふと庭を見ると、一面の花吹雪。公園の桜が我が家まで春を届けてきてくれたのです。イベントもすべて中止になり、止まったかのように思えた人間の時間ですが、自然のときは着実に歩んでいたのですね。

元気をなくしがちな昨今ですが、こんな時にこそとても大切なものが「センス・オブ・ワンダー」です。以前一度紹介した本ですが、今回再度ご紹介したいと思います。『センス・オブ・ワンダー』は、若い女性向けの雑誌に著者が幼いロジャーとメイン州の自然を楽しんだ経験をもとに連載したエッセー「子どもたちに不思議さへの目を見開かせよう」がもとになっています。

子どもたちの世界は、いつも生き生きとして新鮮で美しく、驚きと感激にみちあふれています。残念なことに、わたしたちの多くは大人になるまえに澄みきった洞察力や、美しいもの、畏敬すべきものへの直観力をにぶらせ、あるときはまったく失ってしまいます。

もしもわたしが、すべての子どもの成長を見守る善良な妖精に話しかける力をもっているとしたら、世界中の子どもに、生涯消えることのない「センス・オブ・ワンダー = 神秘さや不思議さに目を見はる感性」を授けてほしいとたのむでしょう。

レイチェルはこう書いていますが、実は今センス・オブ・ワンダーが必要なのは私たち大人でもあるのです。でも遠くに出かけることもできないのにどうやって自然の美しさを感じることができるでしょう。

目にはしていながら、ほんとうには見ていないことも多いのです。見過ごしていた美しさに目を開く一つの方法は、自分自身に問いかけてみることです。「もしこれが、いままでに一度も見たことがなかったものだとしたら？もし、これを二度と再び見ることができないたら？」と。

レイチェルは友人と夜の海辺に寝転んで、何百万という星が暗い夜空にきらめいているのを見あげていました。この美しい眺めが、一生に一度しか見られないものだったら、この小さな岬は見物人であふれかえていたことでしょう。でも同じような光景は毎年何十回も見ることができます。見ようと思えばほとんど毎晩見ることができると、人々はおそらく一生見ることはないのです。

たとえ、たった一つの星の名前すら知らなくとも、子どもたちといっしょに宇宙のはてしない広さのなかに心を解き放ち、ただよわせるといった体験を共有することはできません。子どもといっしょに宇宙の美しさに酔いながら、今見ていることがもつ意味に思いをめぐらし、驚嘆することもできるのです。

心を解き放つこと、おそらくはまだしばらく続く新型コロナウイルスの影響下で元気を保ち続けるために大事なことではないでしょうか。

鳥の渡り、潮の満ち干、春を待つ固い蕾の中には、それ自体の美しさと同時に、象徴的な美と神秘がかくされています。自然がくりかえすリフレイン 一夜の次に朝がきて、冬が去れば春になるという確かさ— のなかには、かぎりなくわたしたちをいやしてくれるなにかがあるのです。

この春は私も遠くの珍しい花々を愛でるのではなく、道の片隅に咲く小さな花の成長を見守り、一つ一つの花と仲良しになろうと思います。